

人につれられ、未だ見ぬ故国に帰る孤児の姿が今も眼底に焼きついて忘れられない。

新京から酷暑の無蓋車でコロ島へ。待っていたのが浅間丸で病院船、ようやく日本の長崎へ上陸、郷里新潟へ帰ったが生家には台湾より引揚げの一家四人、上海よりの引揚げ四人、私の家族三人計十一人の人口増が食糧事情の悪い最中実家も大変だったと思う。歩兵十六連隊あとの兵舎が引揚者のアヤメ寮となり家族と共に入ったが引揚げ後の生活苦が、待っていたのである。

## 思い出の逃避行

富山県 堀 義雄

私は昭和十三年に創設された満蒙開拓青少年義勇軍に満十四歳で志願した。満州の地に入った第一の思い出は、私たちの乗っていた列車が、匪賊に襲撃をうけ、そのため、関東軍の兵隊が二人戦死し、血に染まって担架で私たちといっしょに牡丹江省の東京城駅に下車

したことです。

義勇軍の第一歩として入所したところが寧安訓練所、広い原野にアンペラ小屋が四、五棟建てられた、井戸も便所も無い場所。翌日から大陸の冬に備えて、私たち訓練生の手により、毎日が自分たちの入る宿舎造り。冬に向けて、飲料水の不足、アメーバ赤痢、ホームシック、食糧不足、匪賊の恐怖に耐えながら寒い冬を過ごす。

浜江省平陽訓練所に翌十四年に移動、ここは、この地が訓練終了と共に開拓団に移行、本格的に理想郷の建設へと胸ふくらませ、各団員の家屋も建築され、十八年ごろから年長組が嫁を迎える者も出て、私も二十年四月に妻を迎え、食糧増産へと努力していたが、妻と一緒に暮した一か月余りで召集され、平陽開拓団の男子はほとんど全員が八月五日までに召集された。終戦時は幹部の井久保陽作、福山博の両先生の他は男子は四、五人と、あとは妻を含め婦女子四十数人がいたとか。

私は満州国境の綏西に入隊した。八月八日からソ連

軍との戦闘が続く。このとき私は部隊から伝令を命ぜられ、牡丹江に乗馬で出発した。

この途中、なつかしい開拓団の同志、畠一久、大野久喜、青柳文作（大野、青柳は戦死）らと出会ったが、共に部隊を離れることもできず、目的の牡丹江に向かった。しかし、牡丹江川を渡る際、乗っていた馬は流され、私は必死でここで出会った山形県出身の玉川忠義と二人でイカダを作り、渡ったが、途中、玉川君は流され死亡、私はどうにか牡丹江近くまでくることができたが、ソ連軍は近くまで侵入、街頭には、開拓民、一般民は銃砲弾をうけ多数死んでおり、牡丹江には入れない状態、私はここで初めて「日本はもうだめだ」伝令の目的が達せられずに戻ることもできず、第二の故郷と定めた開拓団に残して来た妻の顔、平陽の山や川が臉に浮び、何百里あるうとも平陽までなんとしてもたどり着くことを決心した。

北滿からのハルビンに向け南下を目的とした各開拓団の避難民の中に入り、海林、横道河子、亜布洛尼へと歩くこと十日間余り、軍服のみの私、食糧は何もな

く、みんなと助け合いながら途中、山の中のあらゆる木の芽、草の葉、ヘビなど、時には原住民の家畜を殺し、ナマ肉を食べて平陽に向けて南下した。ここでも平陽の同志であり、軍隊を抜け、逃避行を続けている大和田君と出会い、元氣を取りもどし、亜布洛尼の街にたどり着いた。ここから南に、山であるが、五十四キロで懐かしの妻の待つ、自分たちの故郷平陽があると思うと、一層と力が出て、二人で線路づたいで、平陽開拓団本部に着いたが、懐かしい平陽には、誰一人としておらず、本部内や各家屋は略奪され、抜けがらであった。私の部落にも行った。知人の満人がいたが、妻の行き先は知るはずがなく、ハルビン方向に南下したらしいとの推理で大和田君と二人で、ここから苦しい逃避行が始まる。

平陽から山越えて三道中河、中河を経てハルビンに向かったが、中河まで歩くこと三十五日間、ソ連軍の捕虜から脱走すること三回、九月末日から二十一年三月十四日まで五常中河で暮したが、ここでも原住民に銃殺場に私を含む四人が出され、二人は銃殺された。

私はなんとか生き残れたが、三月十五日、再び中国共産軍に捕らえられ、運よく十六日には逃走した。

私はここで、大和田と二人、平陽開拓団の集団が阿城方面に在るとの情報を得たので、五常より鉄道線路の上を歩き、十九日の午後八時頃に阿城に着き、日本難民収容所本部を尋ねて、平陽開拓団集団の収容所が阿城にあることを知ることができた。このときの嬉しさは言葉では表現できない。一時も早く行きたい。しかし、明朝でないと訪れることは出来ない。妻の生死は判らず、一夜を収容所本部で一睡もせず、翌朝平陽開拓団集団（团长井久保陽作）収容所を尋ねた。このとき井久保团长が「堀さん、奥さんは生きていますよ、男の子を残念だったが早産された。だが現在は高熱で寝ておられるが、元氣だ心配はいらないよ」（召集のさい、妻が妊娠していることは知らなかった）と言われた。

七か月間余りの避難、逃避行の苦しみが一度に脳裏から去って行った。生きて逢えてよかった、と妻の手をしっかりと握りしめたあの時を今も忘れることはで

きない。阿城収容所は約八千人の北滿各開拓団の収容者があり、四千三百人余りが死亡したとか。八月三日阿城を出発、十月十二日博多港に上陸、戦前の軍需工場であつた近くの日本電工に就職。三十年余り勤務。現在妻と二人で農業に従事している。

## ああ！満州

石川県 久木 孝 作

### 渡 満

私は昭和二年小松商業を卒業し、同四年一月、金沢第七連隊に入営、翌五年に除隊し、その年の九月に、満鉄経営の撫順炭砒の經理課へ就職した。

昭和六年満州事変が勃発して以降、石炭の需要が増大してきたので同十九年に牡丹省八面通の光義炭田の開発に移され、撫順から約百人が出張して当った。私は、その經理副科長として、二十年二月光義炭田に赴任した。